龍の子太郎

松谷みよ子全集 5

松谷みよ子全集 5

龍の子太郎

久米宏一 絵

講談社

913.68

松谷みよ子

松谷みよ子全集 5 坪田譲治〔等〕編集

講談社 1971

174P 23cm

内容：5 龍の子太郎

まつたにみよこ

松谷みよ子全集 5 龍の子太郎

昭和46年10月8日 第1刷発行
昭和54年3月28日 第6刷発行

定 価 1200円

著 者 松谷みよ子

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号 112
電話 東京（03）945—1111（大代表）
振替 東京 8-3930

印刷所 共同印刷株式会社

製本所 株式会社 国宝社

© 松谷みよ子 1971 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-228050-2253（3）（児1）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もくじ

その一　龍の子太郎とあや

龍の子太郎はなまけんぼう……2
たいこのすきな赤鬼……11
おかあさんはりゅうだって！……17
さあ、たいへんなことになった……28
あや、たすけにいくよ！……34
力をくれたてんぐさま……42
赤鬼、かみなりさまになる……48
くろがね山へ……61
黒鬼とのたたかい……67
ふしぎなうた声……75
なんたらひろい土地だ……83
大きなむすびが八十八……88

その二　おかあさんをたずねて

にわとり長者……100
手にのこったのはいね三本……108
九つ山をこえて……118
おらまけね、しぬもんか！……125
さあいこう、みずうみへ……134
めくらのりゅう……142
どうしてりゅうになったの……148
龍の子太郎のねがい……155
ひろい土地が生まれたよ……163
作品覚書……170
「龍の子太郎」をめぐる世界……172

その一

龍の子太郎とあや

龍の子太郎はなまけんぼう

けわしい山が、いくつも、いくつも、かさなりあってつづいている山あいに、小さな村があります。村の下には、すきとおった谷川が、コボコボと音をたててながれていましたが、あたりはまるっきりのやせ地で、石ころだらけの小さな畑からは、あわだの、ひえだの、まめだのが、ほんのぽっちりとれるばかりでした。おまけに、ここらにはわるい鬼がいて、ようやくみのった作物を、できたかとおもうと、根こそぎさらっていってしまうのです。まったくまずしい村でした。まったく、すみにくい村でした。

それでも、村の人たちは、一つぶ一つぶまめをまきながら、

一つぶは千つぶになあれ
二つぶは万つぶになあれ

とうたって、朝くらいうちから、夜は手もとが見えなくなるまで、せっせ、せっせとはたらいていました。

さて、その村の村はずれの小さな家に、ひとりのばあさまが、太郎という男の子とすんでおりました。

太郎にはふしぎなかたちのあざがありました。うろこのかたちのあざが三つずつ、右のわきの下にも、左のわきの下にも、はっきりついているのです。あれはりゅうのうろこだそうな、太郎はりゅうの子どもだそうな、いつのまにかそんなうわさがひろがって、村の子どもたちは、

たつの子

たつの子
まものの子

たつの子
たつの子
まものの子

と、太郎をはやしたてるのでした。こうして、いつのまにか太郎は龍の子太郎とよばれるようになりました。

ところが、この龍の子太郎ときたら、たいへんなのんきぼうずの、なまけんぼうでした。まい日まい日、ばあさまのつくってくれたひえのだんごを三十もって、山にのぼると、

東の風よ　ふいとふけ

西の風よ　ぷいとふけ

と、どら声をはりあげて、うたってばかりいました。おなかがすくとおきあがって、おだんごをたべました。うさぎがいればうさぎといっしょに、ねずみがいればねずみといっしょに、龍の子太郎はおだんごをたべたのです。

それにひきかえ、ばあさまは、龍の子太郎にひもじいおもいをさせまいと、いっしょうけんめいでした。いたむこしをさすりさすり、けわしい山畑へこやしおけをかつぎあげ、さかさになってはたらいていました。

ある日のことでした。

きょうも龍の子太郎が、山にねころんで、空をとんでいく雲をかぞえていますと、ふいに、そばにねころんでいたうさぎがはねおきて、耳をふりました。すると、すぐそばのあなからねずみがかおをだし、これもちょこんとすわりこんで、くびをかしげているのです。

「あれえ、なんだ、なにがはじまるんだ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

龍の子太郎が、ふしぎそうにあたりを見まわしたときでした。かすかなふえの音が、風にのってながれてきました。

「なんていいふえの音だ。だれだろ、ふいているのは……。」

龍の子太郎はおきあがりました。見れば、うさぎも、ねずみも、じっと耳をすましてきいています。ふえの音はしだいにちかづき、やがてすがたをあらわしたのは、いちごの実のようにいとしげな、小さな女の子でした。かたからは、ふじづるであんだふくろをさげています。中には、わらびや、たらのきのめがはいっていました。

「おまえ、だれだ。どこの子だ。おらの村の子じゃないな。」

女の子は黒い目をあげて、龍の子太郎を、ふしぎそうに見つめました。そしてふりむくと、きらきら光ってながれている川の、川上のほうをゆびさしました。

「ん、川上の村にすんでいるんか、なんて名だ。」

「わたしの名はあや、あんたは？」

「おらか、おらは龍の子太郎。」

「龍の子太郎？」

KUME

女の子は、まじめくさってくりかえしました。
「へんな名かい？」
女の子はかぶりをふると、にこっとわらいました。白い歯が光りました。
「いい名まえよ、つよそうな名まえ。」
「そうか、つよそうな名まえか。」
龍の子太郎はうれしくなって、はねあがると、いきなりさかだちをしました。
「おら、さかだちがうまいんだぞう、さかだちのまんまで、だんご、三十はくえる。」
龍の子太郎は、こういばると、ほおずきのようにまっかになるまで、さかだちをしていました。それから、でんぐりがえしを百ぺんもやりました。そして、はあはあしながらいいました。
「うまいだろ。あしたもこいな、おらといのししと、すもうをとってみせる。だんごもやるな、ばあさまがつくってくれるんだ。あやにはおとうさんやおかあさんがいるんだろ。」
「ううん。」
あやはかぶりをふりました。

「おとうさんもおかあさんも、小さいとき、しんでしまったの。わたしは、じいさまとふたりでくらしてるの。このふえ、じいさまがつくってくれた。」

「そうか、じいさまとふたりか、おとうさんもおかあさんもいないんか、なら、おらとおんなじだ……。」

この日から、龍の子太郎とあやはすっかりなかがよくなって、まい日山へよりあっては、ふえをふいたり、けものたちとすもうをとったりしてあそぶようになりました。

ほんとうに、けものたちは、あやのふえがだいすきでした。ふえがなりだすと、まずさいしょに走ってくるのはうさぎでしたが、そうかといって、いちばんまえにすわるわけでもなく、すこしはなれてすわるのでした。これにはちゃんとわけがあって、ふえというものは、すこしはなれてきくものだというのです。

ねずみはくいしんぼうで、いつも、やまいものかけらをかじりながらきいていました。いのししのおかあさんは、十ぴきも子どもをつれてくるのですから、それだけでもたいへんでした。子どもたちは、うりんぼうといって、白と黒のきれいなたてじまです。それ

がずらりとならんできいているところは、とてもかわいいながめでした。あやはすっかりよろこんで、「十ぴきのうりんぼうたち」という曲をつくったくらいです。

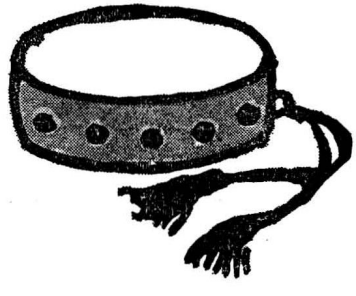
つぎはきつねで、すこし走ってはいそいでからだをなめ、すこし走ってはいそいでしっぽをなめしてくるので、すっかりおくれてやってきました。たぬきはぶしょうで、あなの中にねころんできいていましたし、くまは、さいごにのそのそやってきました。これはねぼすけのせいでした。

こうして、けものたちが、よろこんであつまってくると、龍の子太郎は、もうれしくて、さかだちしてでも、みんなにだんごをくれてやりたくなるのです。

「だんご三十ではたりないなあ。あしたっから、ばあさまにたのんで、五十つくってもらおう。五十でもたりないや、百もってこよう。」

龍の子太郎は、はんぶんずつだんごをわりながらいいました。それでもみんなよろこんで、はんぶんかけのだんごをたべました。

たいこのすきな赤鬼



ところが、ちょうどこのころ、一ぴきの赤鬼が、手に小さなたいこをさげて、のこのこ山をあるいていました。はなのあなをふくらませ、でっかい声をはりあげて、もう、上きげんなのです。

たいこのすきな赤鬼だ
トントカ　トカトカ
スットントン

めしよりすきなたいこだよ

トントカ　トカトカ

スットントン

「ほ、きょうはおもいっきり、たいこをたたいてやるぞ。黒鬼の親分さまに見つかると、やいやい、おまえはまだたいこをたたいとるのか、まだおもちゃもってよろこんでるのか、そのひまがあったら、むすめっ子ひとりでもよけいにさらってこい、と、目ん玉がとびでるほどしかられるが、なあに、きょうはだいじょうぶだい。きのう、にわとり十羽、くろがね山へおとどけしておいたもんな、いまごろは黒鬼さまは、にわとりくって、ひるねだべ。」

赤鬼は、にかにかわらいながらあるいていましたが、上がたいらな岩を見つけると、よろこんでたちどまりました。

「ん、いいどいいど、この岩なら上等だ。おらがこの上にのぼって、たいこをたたく。す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com